【16】

氏名	長砂實（ながすなみのる）
学位の種類	経済学博士
学位記番号	論経博第28号
学位授与の日付	昭和46年3月23日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	**社会主義経済法則論**
論文調査委員	（主査）教授 木原正雄　教授 大橋隆憲　教授 菱山　泉

論文内容の要旨

本論文は，社会主義・共産主義経済の法則についての理論的諸問題を考察したものであり，つぎの四つの章から構成されている。

第1章は，「社会主義経済法則論の発展の諸問題」の検討にあてられ，第1節では，マルクス経済学の古典における経済法則論の主要な骨組みの検討をつうじて，現代の社会主義経済の法則を考察する際の源流をもとめ，本論文を一貫する方法論的諸命題をあきらかにしようとしたものである。第2節では，社会主義経済法則論の発展過程をあとづけ，発展の諸段階における主要な特徴を現代的視角からとりあげ，あきらかにしようとしたものである。

第2章は，「現代社会主義経済法則論の一般的諸問題」の考察にあてられ，第1節では，現代社会主義経済学が社会主義の経済法則の諸性格をどのように把握しているか，第2節では，社会主義・共産主義経済学の諸範疇・法則はいかに体系的に展開されなければならないかについて，これまでの諸説を批判的に検討し，社会主義経済学の端緒的範疇を「社会的生産物」＝「社会主義的生産物」にもとめる見解をあきらかにしようとしたものである。

第3章は，「社会主義・共産主義の個々の経済法則の諸問題」の考察にあてられている。第1節では，社会主義のもとでの商品生産・価値法則についての論争の検討をつうじ，社会主義的生産（物）を「直接に社会的な生産(物)」と「非本来的商品生産」との二重性の統一においてとらえ，また社会主義的生産のもっとも一般的な法則としての規制者法則を「直接に社会的な社会的必要労働時間の法則」と「非本来的法則」の二つにもとめる見解がのべられている。第2節では，基本的経済法則の概念について考察し，社会主義の基本的経済法則についての従来の諸説を批判的に検討し，「純生産物」説に立脚して，社会主義・共産主義の基本的経済法則，生産関係，経済的範疇，経済的矛盾についての見解がのべられている。第3節では，純生産物が社会主義・共産主義のもとでも必要生産物と剰余生産物に分割されることについての質的規定性と量的規定性が考察されている。第4節では，社会主義のもとでの労働生産性向上の経済学的把

握についてのこれまでの通説を批判し，それが社会主義・共産主義の特有経済諸法則に表現されなければならないことについてのべられている。第5節では，いわゆる「国民経済の計画性をもったつりあいのとれた発展法則」についてのこれまでの論争を整理し，「均衡性」と「計画性」とを区別し，社会主義・共産主義の内在的経済法則とはことなった性格をもった法則，すなわち外的法則としての「生産の計画性の法則」としての意義をあきらかにしている。

第4章は，ヨーロッパの社会主義諸国の経済改革における経済諸法則の「利用」の諸問題の考察にあてられている。第1節では，社会主義社会の過渡的性格にかんする国際的論争を検討し，社会主義社会の現在の発展段階をどのように規定すべきかについての問題の解明をこころみている。さらにこの節では，経済改革の背景についても検討されている。第2節では，経済改革の問題点とその主要な内容についてのべ，経済改革が社会主義・共産主義の経済諸法則の意識的実現＝「利用」とどのように関連しているかの問題の解明をおこなおうとしたものである。さらにこれまでの章で考察された社会主義・共産主義の経済法則にかんする抽象的な理論が，現在の社会主義諸国における経済改革の本質を解明するうえで，どのように有効であるかについての検証がなされている。

論文審査の結果の要旨

本論文は，社会主義・共産主義経済の法則について，これまでの通説の批判的検討をつうじ，一貫した立場で独自の見解を積極的に展開している。

本論文の方法論的立場は，つぎの二つに要約することができる。第1は，『資本論』の方法のなかに，社会主義・共産主義経済学が準拠すべき諸原則をもとめ，それらを社会主義・共産主義の経済的範疇および法則を把握するうえで適用しようとしたことである。たとえば，第3章の5つの節における考察の順序は，より一般的・抽象的・本質的なものから，より特殊的・具体的・現象的なものへの展開の方法に依拠し，問題の解明をこころみていることは，その一つの例としてあげることができる。第2は，社会主義と共産主義にかんするマルクス主義の古典的諸命題を分析し，その現実的妥当性の意義と限界をあきらかにし，現実の社会主義社会の過渡的性格を確定したうえで，問題の解明に接近しようとしたことである。

本論文の中心は，第3章であり，独自の見解がもっとも積極的に展開されている。すなわち，第3章第1節でのべられているように，社会主義・共産主義経済学を体系化するにあたり，「直接に社会的な社会的生産・生産物」を共産主義的生産様式の端緒的範疇としてとらえ，高度な共産主義への過渡的性格，すなわち，まだ旧社会のおおくの母斑をもち過渡的性格をもった社会主義のもとにおける社会主義的生産・生産物を，直接に社会的な生産・生産物と非本来的商品生産との二重性の統一においてとらえ，また社会主義的生産のもっとも一般的な法則としての規制者法則を，直接に社会的な社会的必要労働時間の法則と非本来的価値法則の二つにもとめた点，また基本的な経済学的範疇を「直接に社会的な純生産物」にもとめ，さらにそれを必要生産物と剰余生産物に分割し，その範疇的本性およびその生産の法則についての見解は，本論文の核心であるとともに，新しい注目すべき問題提起である。

本論文は，社会主義経済法則論にかんする主要な文献はほとんどすべてとりあげており，その整理と批判的検討をつうじ，自己の見解を積極的に展開し，またその論旨も一貫している点で高く評価することが

できる。本論文は，本質論・構造論的視点から問題をとりあげたものであり，機能論的視点からの分析に欠けてはいるが，社会主義の経済法則の研究としては，最初の本格的研究として，今後の研究にとっての出発点となりうるものである。

よって，本論文は経済学博士の学位論文として価値あるものと認める。